

平安京右京三条一坊三町

—朱雀大路・右京職の調査—

現地説明会資料

2001年9月8日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査地：京都市中京区西ノ京柵尾町1-7

調査期間：2001年2月19日～継続中

調査面積：3000㎡

調査機関：(財)京都市埋蔵文化財研究所

概要：調査地は平安京右京三條一坊三町の東端部に該当する。三町は右京職に推定されていたが、平成9年度の調査によって三町の東西中心に対して対称に配置された大型建物や「右籍所」、「計帳所」と墨書された土器などが発見され、その推定が裏付けられた。

今回、調査の対象となった部分は右京職敷地の東端部と、その東を南北に通る朱雀大路の西側溝および路面の一部である。

主な遺構：調査の結果、右京職に関連する時期の遺構として、井戸2基、掘立柱建物の一部、内溝、整地層などを、その他平安時代末期の建物、井戸、溝、土塹、近世末から近代の溝や井戸、耕作関係の遺構を検出した。

朱雀大路の西側溝は調査区の北端から南端の約90mにわたって検出したが、その西側の一部には築地の痕跡と、それに沿う瓦落ちを確認した。大路の路面は近代の溝や耕地により削平されたものと思われ、路肩の一部を確認したのみである。

主な遺物：遺物は現時点で整理箱約400箱出土している。その内容は土器、陶磁器、瓦の他、井戸に使用されていた曲げ物や箸などの木製品、少量の金属製品（主に銭貨）である。遺物は主に整地層や溝から出土しているが、整地層からは土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器など9世紀後半の土器類が多量に出土した。このなかに「計」と墨書された須恵器鉢がある。瓦類は主に築地の瓦落ち、整地層、朱雀大路西側溝から出土しており、丸・平瓦のほか軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦の他「栗」銘の文字瓦や緑釉瓦がある。

まとめ：今回の調査の主要な成果としてはまず平安京の中心街路である朱雀大路の西側溝の検出をあげることができる。これにより右京職の東限が確定し、内部の詳細な建物配置などの検討が可能になった。また朱雀大路は、これまで左京六條一坊（旧専売公社敷地内）や右京七條一坊（中央市場敷地内）でも検出しているが、今回は単一の調査区として最も長い範囲を検出している。側溝の埋没は、出土土器から平安時代末頃と推定できるが、他の事例でも同様の年代が得られており、朱雀大路がこの時期まで機能していたことがうかがえる。右京職内部の遺構としては数棟（少なくとも3棟）の建物および井戸2基があるが、敷地の縁辺部に当たるためいずれも小規模である。整地層は調査区北東から中央やや北よりに位置する下層の旧流路跡の湿地を埋め立てたものである。整地は何度かくり返されたようで、9世紀～10世紀前半頃までの遺物を含んでいる。右京職の存続期間を示す可能性がある。

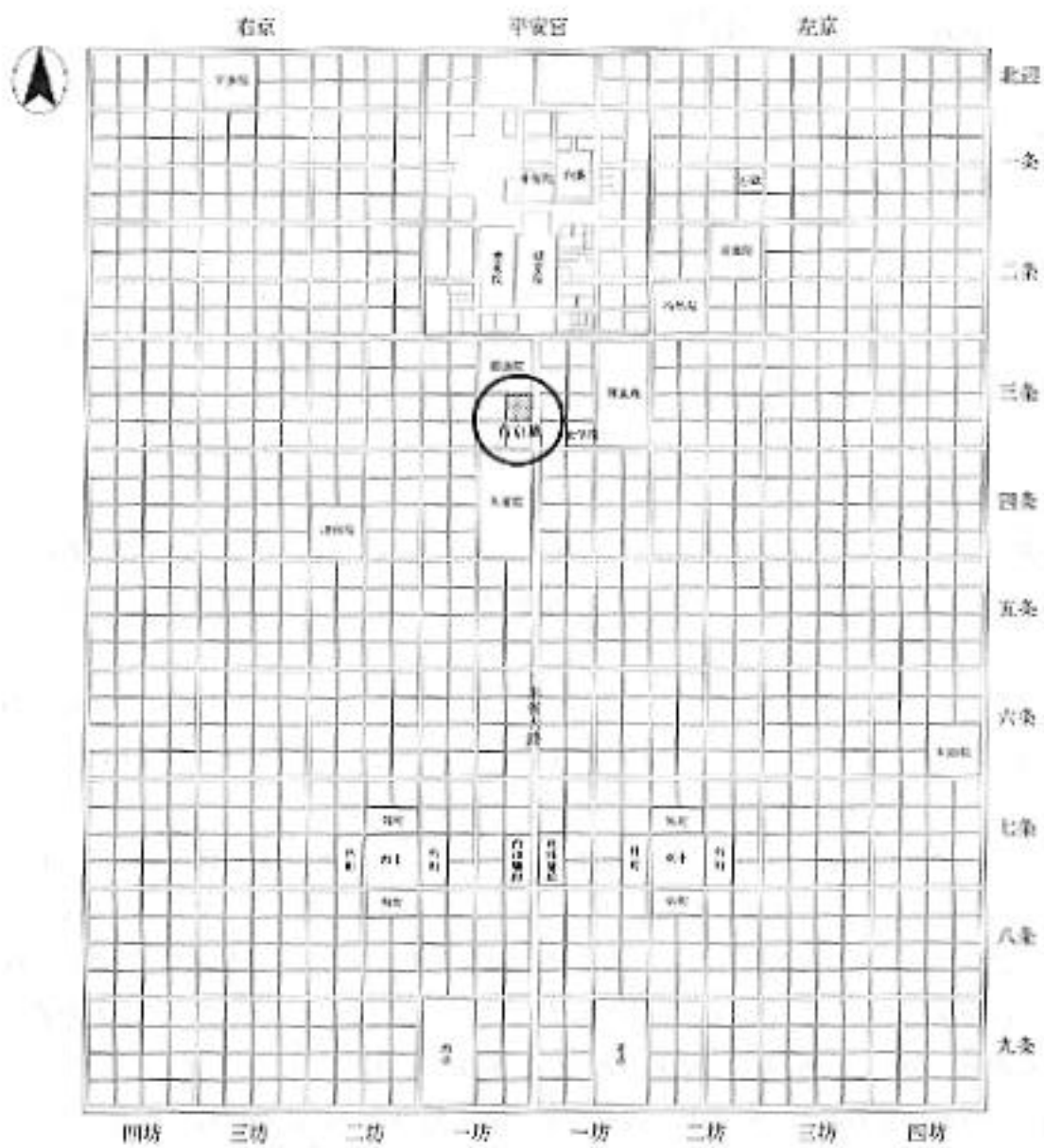


図1 調査地位置図

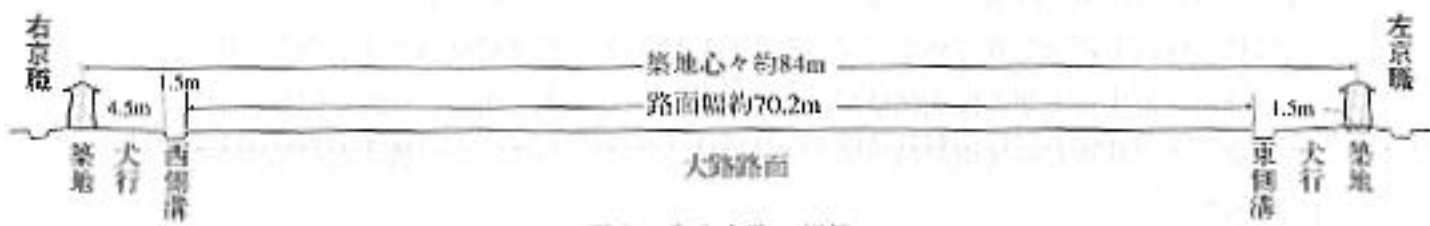


図2 朱雀大路の規模

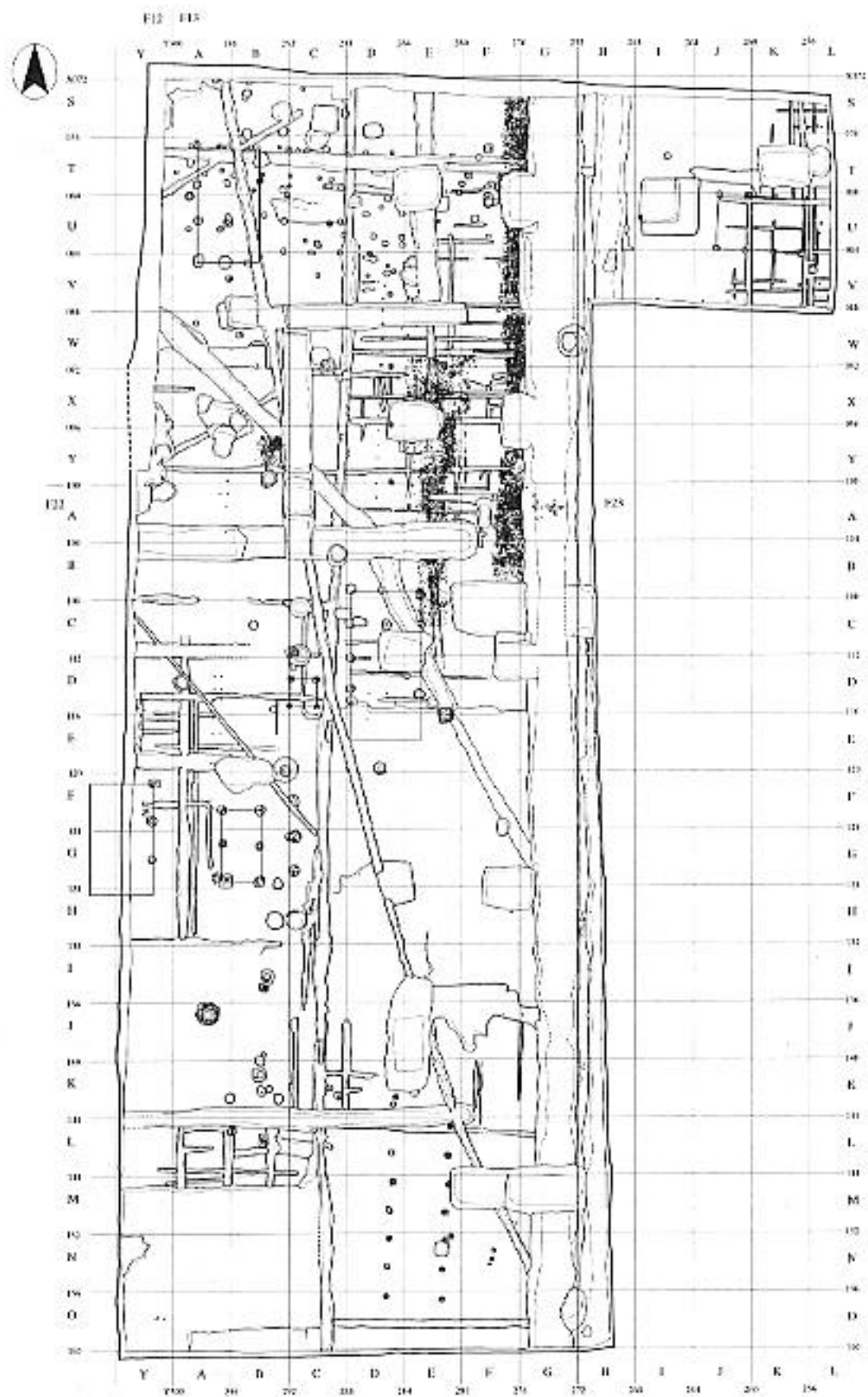


图3 调查区平面图 (1/400)

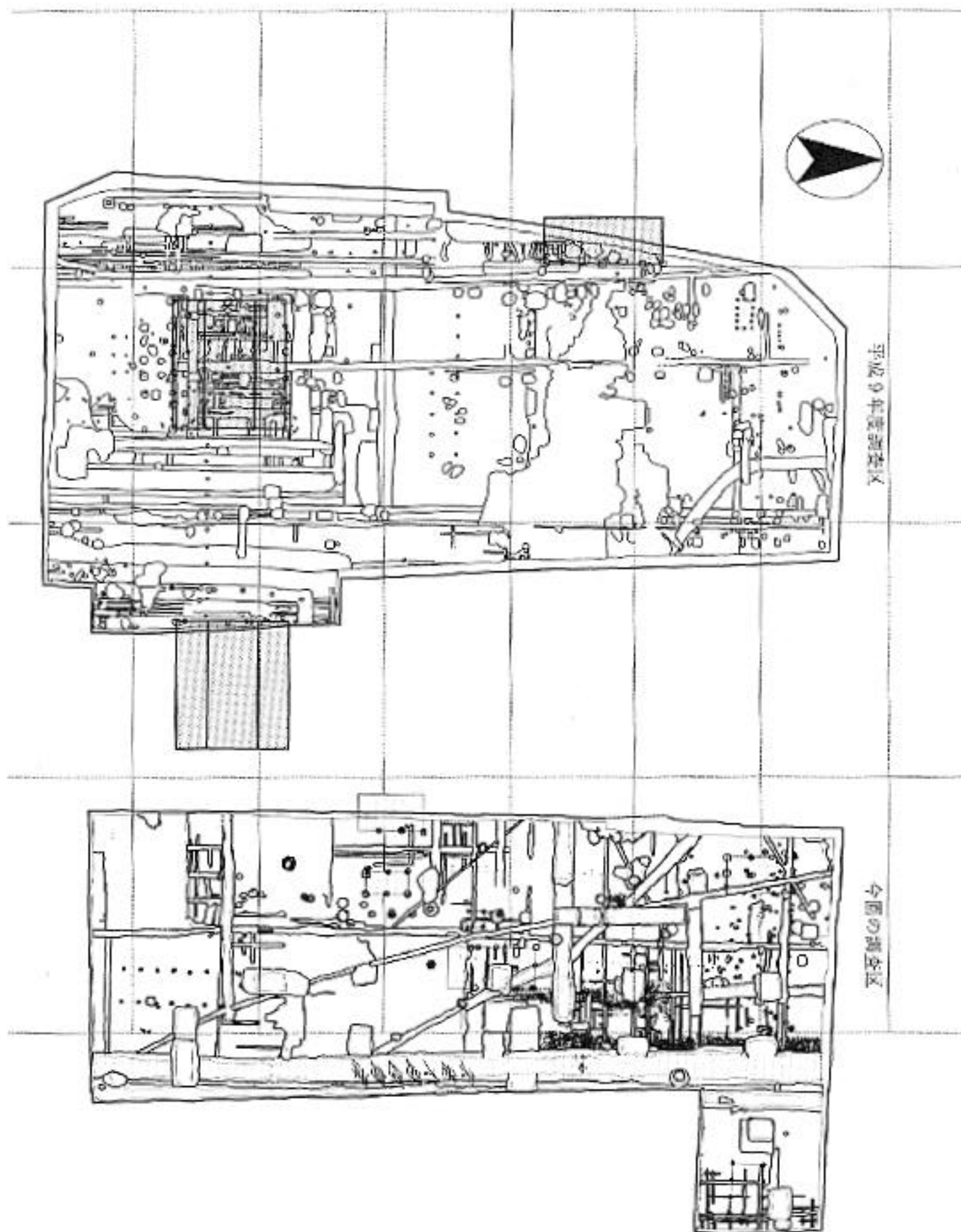


図4 右京遺構図 (1/600)

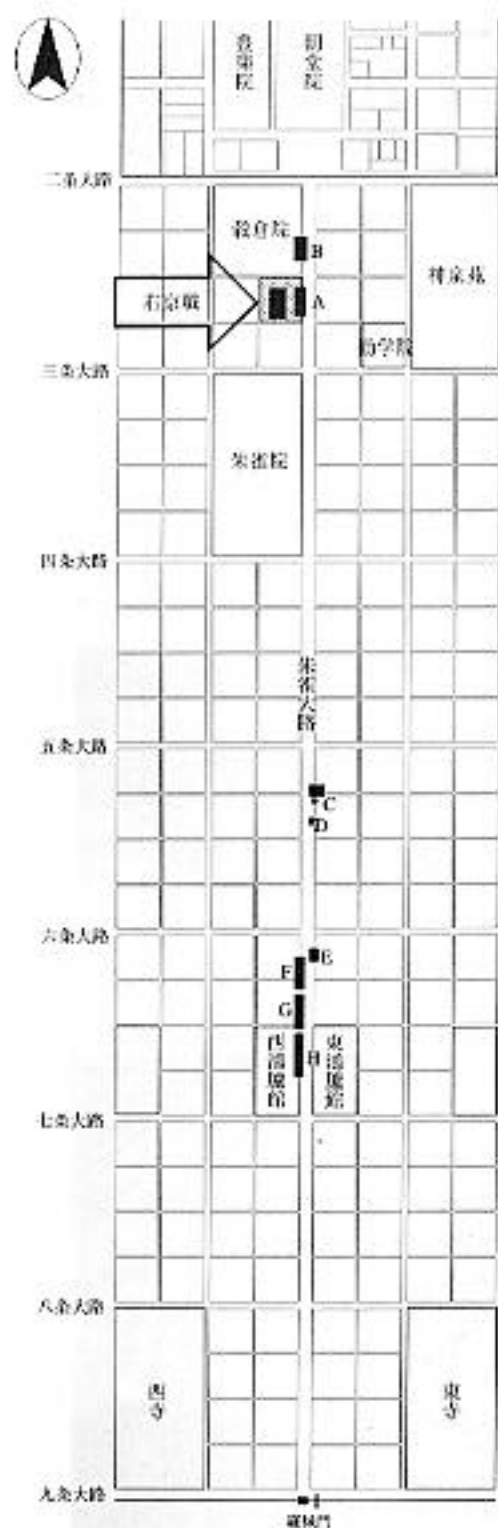


図5 朱雀大路の調査

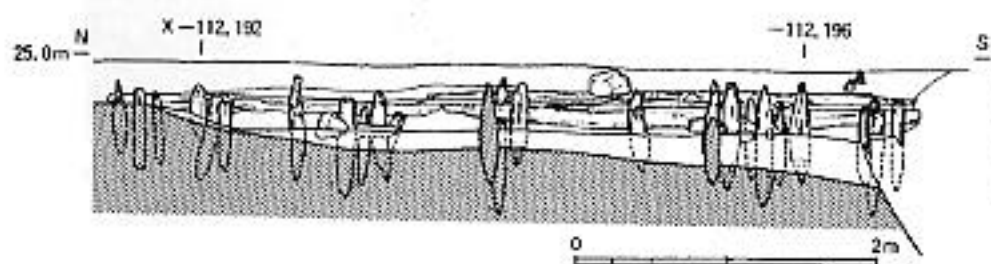


図6 右京七条一坊で検出した朱雀大路と溝の護岸

朱雀大路

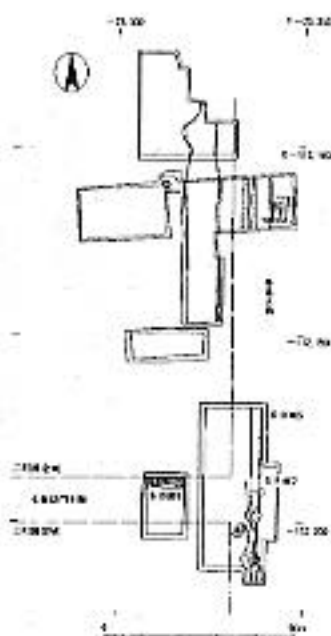
平安京の正門羅城門から平安宮の朱雀門まで京の中央を南北に貫く主要街路。

『延喜式』には築地芯々二十八丈（約84m）と記されている。

この大路の遺構はこれまでも左京六条一坊や右京七条一坊などで検出しており、ほぼ文献通りの規模を確認しているが、側溝の幅は『延喜式』の記載より広く、3~6mで川状になっていた所もある。こうした京内の街路の管理も京職の仕事だった。

右京職

左京職とともに左京・右京の三条一坊に置かれた役所。その職掌は司法・警察・京住民の戸籍など京内の行政全般にわたり、左右の京職がそれぞれ左京、右京を管轄した。しかし、後には司法・警察権が検非違使に移行し、さらに院政期には一般行政の一部も検非違使が担当することになり、役所としては衰退の一途をたどった。平成9年度の調査では「右籍所」、「計帳所」など右京職の部署名が墨書された土器が出土している。





朱雀大路西側溝と築地



右京職の井戸跡



墨書土器「右籍所」(平成9年度出土)



墨書土器「計帳所」(平成9年度出土)